

近代のなかのネーション／ネーションの なかの前近代

——ネーション-ステイト研究における近代主義と永続主義——

野村 明 宏

はじめに

ネーションやナショナリズムをめぐる議論が喧しい。なかでもとりわけ、E・ゲルナーやB・アンダーソン、E・ホブズボウムらに代表される「近代主義的アプローチ」からネーションやナショナリズムを近代的現象として捉える議論が、主流となって論じられている。むしろ、彼らの議論が世に問われてすでに十数年経った現在においては、ほとんど基本的な前提になっているといっても過言ではないだろう。

ただし、彼らの議論が主張するとおり「ネーションやナショナリズムは近代的現象である」ということを素直に受け入れて現実の世界の方へ目を向けたとき、その認識とのギャップにある種の戸惑いを感じざるをえない。両大戦のナショナリズムに限らず、冷戦終焉後の世界秩序においても、解決の糸口の見つからない過激化する民族紛争が頻発しているからだ。こうした紛争は新たなネーション-ステイトの分離独立を旗幟に掲げることが少なくない。そして当然のことながら、上のような研究者の認識とは対照的に、紛争当事者にとっては自らのネーション（あるいはエスニシティ）が決して近代になって突如としてあらわれたものではなくて、近代以前に遡る歴史や伝統によって育まれたものであると意識されている。また、われわれの素朴な実感に照らしてみても、このような意識は連続している。つまり、ネーションとは遠い過去から連綿と繋がった共同体に起源すると信じられているのである。

それゆえに、ネーションは近代的現象にすぎないのだとみなす近代主義的アプローチの主張が大きなインパクトをもっていたわけである。しかし、それらは必ずしも現在の悲劇的憎悪や殺戮に対する有効な論点を与えているわけではない。たとえ、ナショナリズムを近代の発明とする彼らの認識がいかに正しいものであっても、なぜ現実に人々の感情がナショナリストの本質主義的な煽動に共鳴してしまうのかという問いに十分に答えられてい

るわけではないからだ。むしろネーションやナショナリズムの問題に関しては、研究者の認識と生活者の素朴な日常感覚との間にあるこの極端な対照性こそが、ネーション-ステイトという社会共同体がはらむアポリアを端的に示していると考えなくてはならない。

現代社会における政治、経済、科学・技術などのダイナミックなグローバル化の進行を前にして、ネーションのゆらぎや解体という言説が、今日まことしやかに語られている。しかしその一方で、東欧や南アフリカのように、逆に新たなネーションの立ち上げを社会秩序の安定確保のための支柱に置こうとする動きも現実にもみられる。もちろん、ネーションに代わるような、人々を動員し、政治的・文化的に結集させる新たな枠組みが見出せないという事情もある。しかしそれはネーション自体が依然その有効性を失っていないことの証明でもあろう。

このような現状を分析するならば、ネーションが近代的現象であるということを含弧に入れることから始める必要がある。むしろネーション形成のなかに残る前近代的側面について検討していくことが、枢要になってくるはずだ。いうまでもなく、前近代からの持続性を検討することは、なぜネーションがひとびとに対して情緒的な側面を強力に駆動させ得るのかという問いと直結しているからである。このような問題意識を踏まえて、本稿の中心的な検討課題は、近代化のプロセスにおいてネーションが明確に形成されていくなかで、近代以前から持続する歴史や伝統が占めている位置を明らかにすることである。

議論の展開としてまず、ネーションがいかなる意味で近代的現象であるかを押さえた上で、前述の議論に入っていくことにしよう。そこで次章においては、近代主義的アプローチのなかでもっとも明晰で、しかも広範な影響を与えた研究のひとつであるアーネスト・ゲルナーの議論を中心に検討することからはじめてみたい。

1 近代社会としてのネーション-ステイト

1-1 ゲルナーの近代主義的アプローチ

ネーションやナショナリズムが近代的現象であるという主張は、ナショナリズム研究の創始者とみなされているハンス・コーンやカールトン・ヘイズ、E・H・カーらによって、すでに第二次大戦中からなされているのであるが、それが明確なかたちで示されたのはゲルナーの *Nations and Nationalism* (1983)¹⁾ においてである。というのは、コーンらの初期のナショナリズム研究は、思想家や知識人らによるナショナリズムのイデオロギー的、思想的側面を分析し、その近代性を指摘したのであり、必ずしも当時の民衆の「ネーション」への帰属意識が、近代においてどのように形成されたのかについて示したわけではなかったからである。それに対して、ゲルナーは近代における社会構造上の諸変化が、

ネーション形成のマトリックスとなったということを明らかにしている。ゲルナーの議論は、近代以前にはみられなかったさまざまな社会構造上の特質が、産業社会の成立と維持のために現れ、それが結果的にネーションを産み出したということを提示している。「現象としてのナショナリズムは、ある社会条件のまとまりに本来的に備わっているものである。そしてそのような状況が、たまたまわれわれの時代にあったということなのである」²⁾とゲルナーは論じているように、農業社会と産業社会との構造的な断絶に着目することによって、彼はネーションとナショナリズムを近代的現象として析出している。

1-1-1 産業化とネーション形成

それでは、ネーションの形成をもたらしたとされる産業社会の構造とはいかなるものなのだろうか。それはまず第一に、高い生産性を得るために不可欠な分業体制が挙げられる。分業体制は、新たな職業の急激な増加と都市化の急速な発展を伴い、農業社会のような何世代にもわたって子が親の職業を継いでいくというスタティックな社会から、空間的にも階層的にも相対的に高い移動性をもつ社会への変容をもたらした³⁾。急激な経済成長によって生じた、巨大なまでの物質的な欠乏感を満足させるために、望むか否かに関わらず、人は動的であらねばならなかったのである。そしてこれらの直接的帰結として、前近代社会において超え難く存在していた階級間の断層を埋める方向へむかわせる平等主義的イデオロギーが生じることとなった。ここでの重要な論点は、まず平等主義が先行してあり、それが階級間の壁を突き崩すような社会的ダイナミズムを生み出したのではなく、まったく反対に産業化によるダイナミズムが平等主義をもたらしたという点である⁴⁾。そしていうまでもなく、この平等主義がネーション形成の導引力のひとつとなった。

さらに産業化がもたらした、より重要な影響はリテラシー（読み書き能力 literacy）やヌーメラシー（数量的思考能力 numeracy）、様式化された身体技法が広く人々に習得されていったということである。産業化以前では、人々は比較的狭い地域ごとに言語的、文化的に多様であり、身体的基本的な動作でさえ規範化されていなかった。もちろん文字や数字を自由に扱えるのは聖職者や貴族、商人など特定の階層に限定されていた。ゲルナーは、近代以前では一部の階層にだけ必要とされていたこれらの文化を「ハイカルチャー high culture」と呼ぶが、産業社会の成立は万人によるハイカルチャーの習得を必須条件としていたのである。

産業社会が、ハイカルチャーの大衆への浸透を必要としたのは、その分業体制が要求するものである。基本的に産業社会の分業は、高度な技術を必要としない専門性を特徴としている。つまり、全体としては複雑な作業工程であっても、ひとりひとりに課せられる作業は、分業と大量の労働力によって構成された単純作業であり、労働者に要求される能力

は、すべての人との共通化、標準化に基礎づけられている。そのために、ハイカルチャーの大衆化が必要となるのである。分業による専門性は、熟練を必要とするタイプの特殊性ではない。そして近代科学に基づく均質で空虚に拡がる空間と直線的な時間の軸上で、ハイカルチャーを身につけた均質な諸個人は、全体の中のひとつの内的な属性をもつ要素（部分）となり、他者と容易に代替できる単位として社会構造の中に、組み込まれることになる。

ハイカルチャーの浸透は、コミュニケーション形態においても、変容を及ぼすことになる。農業社会では、その場、その時の状況（コンテクスト）に強く依存していたのに比べて、近代社会のコミュニケーションは濃密ではないが、相手を選定しない、コンテクストから離れ、制度化された書き言葉によってなされることになる。それによって、多くの人間にとって狭く限定された対面的コミュニケーション空間は、国家の領域を覆う広大なコミュニケーション空間へ押し広げられることになったのである。

ただし、コミュニケーション空間の拡がりやネーション形成の要因として着目したのは、ゲルナーが最初ではなく、すでにドイッチュなどが、コミュニケーションの発展による共通の道徳や政治的アイデンティティの形成を指摘し、ナショナリズムとの密接な関係を説明している⁵⁾。しかし、これだけの分析では、必ずしも人々が共有する文化の均質性が、ナショナリズムと繋がる必然性を示したことはない。それに対して、ゲルナーのオリジナルな着眼は、ハイカルチャーの教育が個人や地域共同体単位では不可能であり、ほかならぬ国家の大規模な教育制度によって可能にされたことを指摘したところにある。それによって文化の均質性やコミュニケーション空間の拡大が、ネーションやナショナリズムと密接に繋がることへの説得的な説明を与えることができたのである。

ゲルナーが比喩を用いて述べているとおり、「文化には植物と同じように、野生のものと同栽培されるもの」⁶⁾とがあり、近代文化は国家の手によって育てられねばならないものとなったのである。産業社会が人々に要求するコミュニケーション能力は、ローカルな共同体や中間集団によっては習得できず、近代国家の中央集権化された大衆教育システムによって提供される必要が生まれたのだ。ハイカルチャーの大衆への浸透は、学校や軍隊のようなそれまでの共同体の外部にある組織に担われることになったのである。したがってここに、均質で画一的な能力をもった人々が、中間集団を媒介せずに国家と直接的な関係をもつネーションの基本的な性格が付与されることになった。

大衆へのハイカルチャーの浸透をもたらす国家の役割は、再生産の維持と経済発展の持続のためにますます必要となり、人々の日常生活の中で大きな比重を占めるようになっていく。産業化によって、国家の重要度がこれまでになく高まり、政治的な単位と文化的な単位との一致を志向するネーション-ステイトが形成されたのである。逆に言い換えれば、

たとえ前近代的な農業社会にも愛郷心 patriotism と呼ばれるものが備わっている、本来それはナショナリズムのように政治的な主張とは結びついていないということなのだ⁷⁾。

このような洞察に基づき、ゲルナーはナショナリズムが前近代のエスニシティから断絶している明らかに近代的なものであるとして、次のように述べている。

「ナショナリズムはこれらの神話的で、自然的、既知と考えられているものの目覚めや主張なのではない。ナショナルな世界以前からの生の物質的、文化的、歴史的遺物として当然のように用いられるが、ナショナリズムはまったく反対に、現在広まっている状況に適した新たな集合の結晶なのである」⁸⁾

こうして、ゲルナーはネーションとナショナリズムを近代における産業化以降の社会に特有の現象であると結論づける。彼は社会構造の変容に焦点を合わせ、客観的レベル、あるいは身体的なレベルでの統一性と均質性の形成によって立ち現れたネーションの側面を捉えたのである⁹⁾。

1-2 ゲルナーの問題点

以上のようなゲルナーの機能主義的な議論は、非常に説得的で、一貫した理論枠組みを構築しているが、次のような欠点を指摘することができる。つまり、産業化はそれ自体の性質として、永続的な発展を追求し、その領域の自己拡張をめざすダイナミズムをもつが、近代国家はそれに対して逆機能的なはたらきも併せもつということである。確かに、産業化はその初期段階ではハイカルチャーの浸透に国家という媒体を必要とする。しかしグローバル化が進展していくにつれて、ネーションの範囲を大きく超える文化を形成していくのである。論理的には、そのような普遍化はネーションを単位とする「文化的差異」の解消へと向かわせるはずだが、産業化の発展がそれよりも小規模な単位であるネーションに譲歩するとはどういうわけなのだろうか。

ゲルナー自身は、特権を剥奪されることになる知識人層による抵抗と自文化維持の機能を、以上の批判点に対する答えとして用意しているように思われる。つまり、中央集権的教育システムのなかで、統一的で均質なハイカルチャーをつくり、それを普及させる役割を担う知識人層は、国家の枠組みを超えて平準化していこうとする文化の流動性に対して、常に新たなハイカルチャーを産出し、自己差異化を働きかけるのである。このような平準化と差異化のダイナミズムを、ゲルナーは「エントロピー」と「抗エントロピー-entropy resistance」という術語で示している。この議論はある程度の説得力をもっているものの、これまでのゲルナーの議論からはいささかズレてしまうことになる。なぜならば、ゲルナー

は産業化による社会構造の変化がもたらした、「間接」的な意図せざる結果としてネーションの形成が内的に決定されていったことを示していたからである。それに対して、知識人による「抗エントロピー」の作用から説明するネーションの編制は恣意的な「直接」的帰結であり、すでに先行的にネーションがある段階での状況を示しているにすぎない。

ゲルナーの議論がこのような欠点を包含している原因は、端的に言って、彼が経済発展における「資本主義」にではなく、「産業化」に注目したことにあると考えられる。ただし、ゲルナーがネーション形成の因子として、前者ではなく、後者に注目したのは、ナショナリズムが旧ソ連や東欧、中国などの共産主義圏にも存在していたことを考慮に入れていたからでもあろう。だが、エントロピーによる平準化と抗エントロピーによる差異化のダイナミズムの緊張の中でのネーションの編制を検討していくためには、以上に加えて資本主義の「不均衡発展」についても考えておく必要がある。産業化への注目は、一国内での社会構造の変化についての考察に適しているのに対して、資本主義への注目は、グローバルな規模での社会構造の変化について焦点を合わせやすいのである。つまり、それはネーション形成について、内側からではなく、国家間の関係性から検討することを可能にする。

1-2-1 資本主義の不均衡発展——トム・ネアン

マルクス主義系の理論家であるトム・ネアンは資本主義の不均衡発展を中心にネーションやナショナリズムの起源を検討している。ネアンによれば、ネーションの起源は「民衆の中にも、ある種の全体性やアイデンティティに対する個人の抑制された情熱にもなく、世界規模の政治・経済的機構の中にあるのである」¹⁰⁾。ただしそれは、経済発展の単調な流れにナショナリズムが付随しているというのではなく、そのプロセスの中に不可避免的に生ずる特性にあるといえよう。というのは、常に利潤の産出を追求し続ける資本主義（史的システムとしての資本主義）は、世界のあらゆるところで並行して、同時に発展するのではなく、「中核」／「半周縁」／「周縁」のあいだでの不等価交換と支配・従属関係のもとで進行するからだ。そして、この資本主義経済の不均衡発展による富の不平等配分が、ナショナリズムを発生させる機動力になったとネアンは分析している。両者のあいだにある優越感とルサンチマンがそれぞれの地域の一体性、均質性を生んだことが——とりわけ相対的剥奪感を感じる後進地域の側で——ネーションを形成する力となったのである¹¹⁾。もちろん、このようなネアンの議論だけではネーションの形成を説明するには不十分であるが、ネーションが産業化や資本主義のダイナミズムに逆機能的なはたらきをするのではないのかという先述のゲルナーへの批判に対しては、この不均衡発展論の視角は彼の論点を補足するものとなろう。

1-2-2 国内植民地主義論——マイケル・ヘクター

しかしながら、このようなウォーラーステイン流の世界システム論を援用した議論はマイケル・ヘクターに代表される「国内植民地主義 internal colonialism」の議論でも同様に述べられていることを付言しておく必要がある¹²⁾。国内植民地主義論とは、国家間の関係でみられた不均衡発展を国内のケースにも当てはめたものである。ヘクターらによれば、一国内においても経済的・政治的に支配的な階層と被支配的な階層に分けられているが、この階層分離はエスニック・グループによって分けられる傾向をもっているという。つまり、ヘクターの議論は資本主義の不均衡発展がネーションを統一する要因になるどころか、まったく反対に互いを分離させる要因になっていることを示している。

したがって、資本主義の不均衡発展は先ほどのネアンの議論とヘクターの議論のように、場合によって正反対の結果を産み出していることになる。前者の議論が、十八世紀頃の初期的なネーションを対象とし、後者の議論は現代のイギリスやアメリカなどの移民やマイノリティ・グループを対象としているなど、時間的に大きなギャップがあるとはいえ、このようなネーション形成の要因を経済還元主義一辺倒で処理することにはやはり無理があるといえよう。

ウォーカー・コナーが説得的に論じているように、エスノナショナリズムはあらゆるタイプの経済条件の中で生じているのである¹³⁾。たとえば、低開発で、経済的弱者の地域でもイタリア南部やイングランド北西部のように民族問題を引き起こさないところもあれば、ブルターニュ（フランス）のようにナショナリスティックな傾向をもつ場合もあり、逆にイタリア北部や、バスク（スペイン、フランス）、ケベック（カナダ）など経済的に富裕な地域が自立を求めてナショナリスティックな色彩を帯びる場合もある¹⁴⁾。

したがって、資本主義の不均衡発展が、ネーション形成の大きな要素であるということには、次のような指摘を加えておくとよいだろう。すなわち、後進地域の先進地域に対するキャッチアップ型の経済発展の中では、後進地域による先進地域の模倣——たとえばそれは、イングランド化、フランス化、或いは西欧化、アメリカ化である——がなされている。しかし、それらの経済的、技術的な概念やモノの移植は——それらはエリートに主導される——文字どおりのコピーではない。移植される地域の文化的特性；宗教、言葉、伝承、肌の色、民族性等々を考慮することが、そのような移植をスムーズにおこなうための不可欠な要項となっている。つまり、この点がひとつのネーションを分裂させずに、統一へ導くエッセンスとなるのである。こうしたことから、ネアンが以下に述べているように、ネーションには既存の特徴が保持されることになる。

「啓蒙主義的合理主義とは、まったくかけ離れているロマン主義的文化がナショナ

リズムの拡がりといつも手を取り合っているのはこのため〔スムーズに模倣をするため：引用者〕である。ナショナリズムの新しい中産階級のインテリは大衆を歴史の中に招き入れねばならなかった。そして、その招待状は彼／彼女らの理解できる言葉で書かれる必要があったのである¹⁵⁾

したがって、ネアンが述べるように、ネーションには近代主義的側面だけではなく、近代以前から連続する大衆の文化的背景とつながっている永続主義的側面も、「近代のヤヌス」として併有していると考えることができる。

しかしながら、このネーションの永続主義的側面については、とても重要なトピックなので、さらに詳しい考察が必要である。それについては、次章以降の課題になっている。本章ではあと少し、近代主義的アプローチから析出できる議論が残っている。

というのは、ネアンとヘクターの議論のように矛盾をはらむことになる資本主義の不均衡発展には以上のように多くの留保すべき点があるにしても、彼らの議論が提起したもう一つの論点は依然として重要であると思うからだ。すなわち、国家間の関係からネーションを考えていくことは、有効なパースペクティブとして残っているのである。

次節ではネーション-ステイトの境界性に注目して、経済要件以外からネーション形成とインターステイト・システムとを関連づけたアプローチをしていきたい。

1-3 辺境から境界へ

いわゆる「国家」という語自体は、「事物の状態」などを示すラテン語の status に由来し、政治的な意味ではすでにローマの頃から用いられているのだが、この語を現在使われている意味に確定し、流布させた功績は、主としてマキャベリにあるということにはおそらく異論がないだろう。マキャベリは *lo stato* を常に一貫した用法で扱ったわけではないが、『君主論』(1532) では、*lo stato* は人々に対して一定の領域内での権力行使をおこない、コントロールをする能力を備えた独立の組織体を示す語として用いられていた。そしてこのような意味をもって「ステイト」という言葉は近代ヨーロッパ諸国の政治用語の中に採用されていったのである。

しかしながら、マキャベリが用いた意味で、現実に国家の境界が明確に決定されたのは、ヨーロッパでも17世紀の半ばか、18世紀の初頭のことであった。キリスト教圏やイスラム圏のように、それまでの「国家」の範囲はいわば「辺境 *frontire*」によって曖昧に設定されており、現在みられるような「境界 *boundary*」ではなかった。たとえば、都市国家はその後背地を完全に統合しようとはしなかったし、帝国でも人々の諸事や規範に関する統制や監視はしなかったのである。

いうまでもなく、境界を決定するという事は、自国だけの問題ではない。それは他との相互承認が必要であり、外部との関係性が問題となるのである。

境界設定をめぐる国家間の関係がヨーロッパで最初に構築されたのは、新旧教徒国の間で戦われた三十年戦争を終結させるために結ばれたウェストファリア条約であり、それは1648年のことであった。初の国際条約とも呼ばれるこのウェストファリア条約によって、神聖ローマ帝国は権力の実を失い、諸国王の領土の確定がおこなわれた。ここに領域国家が成立し、インターステイト・システムが編制されたのである。

それでは、このような国家の領域決定が、ネーション形成とどのように関係しているのだろうか。すでに若干触れているが、それには「辺境」が「境界」へ変容したことが重要なメルクマールになっている。なぜならば、「辺境」を国家の範囲とする場合、「権力」の密度は中心から離れるほどに弱まっていくが、「境界」の場合は、国家の「権力」が中心と同様に周辺にも均等に作用するからである。つまり、国家領土の明確な設定が、中心と周辺が直接に関係をもつことを可能にする。

そして、この国家権力が、領土内の人々に均質にいき渡ったとき、ネーションが立ち現れることになる。

以上の観点から、アンソニー・ギデンズはネーション-ステイトを国境によって限定されている「権力容器 power container」として捉えている¹⁶⁾。そして、ネーションとはその領域に住んでいる人々の集合にすぎないという明確すぎるほど明確な定義をしている。

「ネーションによってわたしは明確に限定された領土の中に集散的に存在し、統一的政府に従属し、国家内の機関と他国の機関によって緩やかに監視されているものを示す。ひとつの「ネーション」は、わたしがここで用いる用語としては、国家がその合法性を要求する領土に統一の行政的支配がいき渡っているとき存在しているだけなのである」¹⁷⁾

ここでギデンズが述べる「監視」とは、たとえば関税や国境管理、パスポートの管理等を指し、それらは自国の中央政府の下でなされると同時に、外国によってもおこなわれているということである。このように、境界の確定と並行して、中央集権の官僚組織の権力構造が境界内に隔々に浸透して、ネーションの形成を促していくことになる。

官僚制の基本的な形態を、次のように簡単に整理して挙げておこう。①領土内での法規と法廷システム。②単一の財政政策。③統一された輸送体系とコミュニケーション・システム。④行政機構の効率化と首都における支配者主導の中央集権。⑤専門化された行政組織の基幹人員の形成。⑥集権的制御の下で独占された軍事組織と軍事技術の開発。⑦家族

構成や福祉、労務保証、保険、衛生などの指導と制度化¹⁸⁾ などである。

このようにネーション-ステイトは、文字どおり「ゆりかごから墓場まで」住民の私的領域へ直接的に介入していくことになっている。あるいは、私的領域と公的な領域の線引きが、きわめて曖昧にされている社会であるということもできる。

こうしたギデンズのネーションに対する認識は非常に明解である。なによりもこの定義の利点は、ネーションを「境界」という客観的基準で判断することによって、ネーションの原初主義的な本質論を避けることができる。つまりネーションを構成するために共有されている属性は、人種や民族、あるいは言語、宗教、慣習などの文化的要件のいずれに基づかれているかを問う原初主義的なアプローチが必ず陥ってしまう袋小路を避けられるのである。

1-3-1 越境するネーション

しかしながら、このような境界主義的アプローチによるネーションの把握は明解である反面、非常に排他的なものとなっている。ひとつのネーションは「国家の主権が要求する領土の中に統一した行政を及ぼしているときだけ存在する」¹⁹⁾ というギデンズの定義は、国家をもたないが、ネーションとしてアイデンティティを自己主張するグループを認めないことになるからである。やはり、ネーションには次のような領土をもたないグループも入るのではないだろうか。

それはたとえば、ユダヤ人やクルド人のような「ディアスポラ・ネーション diaspora nation」。エチオピアやケニア、ジブチにその多く（全人口の三分の一以上）が住むソマリ人のような「失地回復主義ネーション irredentist nation」。そしてケベック人（カナダ）やタミル人（スリランカ）、バスク人、カタルーニャ人（スペイン、フランス）のような「サブ-ステイト・ネーション sub-state nation」である²⁰⁾。さらに、B・アンダーソンが「遠隔地ナショナリスト long-distance nationalists」と表現した移民や難民の存在もそのようなネーションとして挙げられるだろう。たとえば、カナダ・トロントのウクライナ人やオーストラリア・メルボルンのタミル人、ニューヨークのユダヤ人やロサンゼルスの人やベトナム人などは母国から遠く離れて暮らしているが、母国の内戦などの様々な政治的紛争に対して経済的援助を与え、ホスト国の外交政策に少なからぬ影響を及ぼしている²¹⁾。

これらのネーションは国境を越え、他のネーションとモザイク状況のなかで暮らしているにも関わらず、強い連帯意識や帰属意識を保持しているのである。

1-4 近代主義的アプローチの帰結とその限界

このようにインターステイト・システムに基づいた境界主義的アプローチは、客観的な

境界とは無関係なネットワークによって自分たちのアイデンティティを維持しているケースを説明しない。つまり、ネーションの情緒的な側面に対して分析の光を当てていないということである。換言すれば、ギデンズはネーション-ステイトの制度的な側面に焦点を絞っているといえよう。

しかし、同様の問題はゲルナーやネアンらの議論に対しても当てはまることである。彼らは、近代に始まる産業化や資本主義の発達、緩やかな管理システムの領域内への浸透が、人々を規律化し、均質な諸個人を産み出したと論じ、ネーションを近代的現象であると考えた。ただしこれは、空間が制度化されていくことによって現れたネーションの市民的側面であると補足的にいうことができるのである。

そして以上の分析によれば、リベラリズムやマルクス主義を問わず、ネーションは社会の合理化が進み、理性的な主体が確立されていくに伴って、安定していくと楽観視されていた。それが、近代主義的アプローチが捉えたネーション像の論理的に必然的な帰結であったのである。

たとえば、ゲルナーは「後期産業社会では、ナショナリズムは持続していても、弱まり、毒抜きされた形態であることが予想できるのである」と述べている²²⁾。またホブズボウムも、合理的理性によるナショナリズムの終焉を宣言し、ヘーゲルの知をもたらすミネルヴァの梟が、今ではネーションとナショナリズムの周囲を旋回しているとみる²³⁾。彼らは、ネーションを形成し、維持していこうとするナショナリズム運動が、近代社会の成熟によって、徐々に脱政治化し、衰退してゆくものと予想したのである。つまり、彼らにとってネーションは、民族から市民への過渡期の形態とみなされていた。だが、現在のわれわれはその予想が半ば以上外れてしまったことを知っている。ナショナリズムは過激化することはあっても、けっして消え去ることはなかったのである。ミネルヴァの梟は依然として飛び立ってはいなかったのだ。

繰り返しになるが、このような近代主義的アプローチでは、ネーション-ステイト（インターステイト・システム）のなかに生きる合理化された人々の市民的特徴を強調することによって、ネーションを近代的現象であると考えた。しかしこのアプローチは、人々が抱く国家への非合理的な忠誠心や愛着の源泉について説明を与えることは難しい。それでは、なぜ近代ネーションが「祖国のために殺し」、或いは「祖国のために死ぬ」というような事態を生じさせるのだろうか。

そこで次章から、どのようにしてネーションの情緒的な紐帯が、近代化のなかで永続的に途切れることなく、残存しているのかという本稿の中心課題の検討に移っていくことにしたい。

2 創造される伝統と持続する伝統

2-1 ネーション、創造の共同体？

「一般に認められているように、ナショナリズムは、先在していた歴史的に引き継いでいる文化や文化財を用いる。だが、それらは非常に選別されて用いられる。そしてそれらのほとんどは、ナショナリズムによって根本的に変形されるのである。使われなくなった言語は復活され、伝統は創造され、まったく虚構の汚れない純粹さが復興され得るのだ」²⁴⁾

ゲルナーはこのように、ナショナリズムによって生まれたネーションの文化は、近代によって生じた虚構であり、創りのものであると主張する。確かにネーションの文化は恣意的な操作を含み、一般の人々の日常生活の中で自然のままに形成されたものとはいえないだろう。近代社会の大規模な構造変化に伴って、国家による大衆教育システムがネーションを産み出したということは前章で考察したとおりである。近代以前の地域や時代によって雑多な風俗文化から、ひとつのネーションとして統一する均質化されたハイカルチャーが社会変動の転轍機を担ったのであった。ネーションの文化や伝統とされているものは、遠い過去から連続していると名目上は考えられているが、それらはきわめて近代的なものにすぎないというわけである。したがって、このようなハイカルチャーに基づかれたネーションの文化の擬制性の指摘はその意味で妥当である。

2-1-1 伝統の創造論

よく知られているように、エリック・ホブズボウムとテレンス・レンジャーらによる『創られた伝統』が提起した問題も、上でゲルナーが指摘した内容を歴史的な立場から具体的な事例を用いて論じたものである²⁵⁾。彼らが証した「創造された伝統」のいくつかを挙げれば、たとえばイギリスの国会議事堂が十九世紀の改築の際にはゴシック様式を選び、さらに、第二次大戦後の改築の際にも、以前と同様の基本設計が周到におこなわれたということ。スコットランド高地地方における一風俗であったのに過ぎないコートやキルト、タータン柄、バグパイプなどが、十九世紀はじめにスコットランド全体の民族衣装や民族文化として捏造され、その後、愛国的な情熱をもって着用されていったことなどの事例が挙げられる。彼らによれば、遠い過去に起源をもつ伝統文化と現在みなされているものが、実はそれよりもずっと最近に起源をもったものに過ぎないことが実証されている。

2-1-2 伝統の創造論批判

こうして「伝統の創造論」はさまざまな「伝統文化」の、欺瞞によって覆われた虚構のヴェールを引き剥がしていくわけだが、彼らは「伝統」という概念そのものについてはなにも考察を加えていないどころか、逆説的なことに、「伝統」というものの存在を正統性の源泉として暗黙の内に前提しているのである。というのは、彼らはあるひとつの「伝統」に対して、それが最近になって創造されたものにすぎないことを論証することによって、それらは誤謬であり、正統性をもたないと主張している。しかしこの議論は伝統や文化のうちで原初的なもの、より古いもの、操作されていないものが、より正統であり、より真実に近いと述べる議論と、実は同一の論理構造のなかにあることに対してあまり自覚的ではない。「伝統の創造論」は、原初的な伝統の存在を暗に指定して議論が進められなければ成立しないものである。それでは近代において「伝統」とみなされているものが、創造の産物であると言い切るにもかかわらず、その根拠には真正な「伝統」に依拠してしまうという自家撞着を含むことにもなりかねない。何らかの伝統が、創られたものであるから正しくない、非本質的であると断定する行為は、それを解釈し判定する基準となる正統で、本質的なものの存在を同時に認めていることでもあるからだ。

したがって、ホブズボウムらの見解を単純に受け入れるには注意が必要である。端的にいうと、すべての文化はどこかの時点で創られたものであり、真に原初的なものなどないのだから。しかもこのような伝統を創造するという行為自体は、近代のネーション-ステイトに限られた行為ではなく、あらゆる時代のどのような共同体においても、その権威付けや、メンバーの忠誠心を煽るために少なからずおこなわれてきたと考えられる。いかなる伝統も不断に意味の再編、再構築がなされたものなのである²⁶⁾。

2-2 ネーションとエスニシティの論理構造

以上で示された「創られた伝統（虚構）」と「原初的な伝統（正統）」の関係は、ゲルナーらの近代主義的なアプローチによって捉えられる「ネーション（あるいはナショナルリティ）」についても同様に当てはまることを付け加えて論じておいた方がよいだろう。ゲルナーらも同じように——このことについてはB・アンダーソンも指摘している²⁷⁾——、ネーションが「捏造」されたものであり、「欺瞞」であると論じることによって、逆にネーションよりも真正で、純粋な共同体の存在を暗黙の内に前提しているからである。

ネーションを人工物であり、虚構であるとしたときに同時に立ち現れる、原初的であるから正統なものであるとみなされるものは、現在では「エスニシティ（エスニック・グループ）」と呼ばれているものにあたるだろう。しかしそのように述べておきながら、次のようにいうと逆説的にきこえるかもしれないが、「エスニシティ」という言葉自体は比較的

新しいものである。グレーザーとモイニハンによれば、「エスニシティ」は『オックスフォード英語辞典』では1972年版の補遺に初出しており、その最初の用法はデイビッド・リースマンによるもので、1953年に使われている²⁸⁾。あるいはもう少しはやく、社会人類学者のロイド・ウォーナーによるアメリカの都市の地域調査「ヤンキーシティ」研究において、1941年には使われているという指摘もある²⁹⁾。いずれにせよエスニシティという用語は今世紀の前半のアメリカ合衆国で用いられ普及していったことは確かである。

このように、エスニシティという言葉が、アメリカで主として用いられることになった理由は、国の成り立ちがはっきりとしている移民国のアメリカが、文化的にも人種的にも多様であり、「アメリカ人」という語が示すナショナリティがそのような観点からすれば明らかに統一性を欠いていることと深く関係している。「メルティング・ポット（るつぼ）」としてのアメリカ社会のなかで、人種や文化の多様性はアングロ・サクソン文化を中心に「同化」へ向かうという理想が、二十世紀の前半までは掲げられていた。しかし周知のように、1960年前後に始まる公民権運動の高まりを背景にして、それぞれの文化の固有性と多様性の尊重を主張する文化的多元主義＝「サラダボウル」論が叫ばれることになった。「エスニシティ」という概念はそれらの社会運動と深くつながって現れたのである。

つまり、ナショナリティが人工的な器に入ったものにすぎないという虚構性が明白なアメリカにおいては、人々が自らの正統なアイデンティティを要求する場合、ネーションとは別の概念に求められねばならなくなる。そこで、真正な伝統や本源的な文化を保持するものとしての「エスニシティ」概念が要請されることになったと考えられる。

エスニシティがネーションよりもさらに新しい言葉であるということもこのような背景をもっているからだといえよう。

2-3 ネーション—エスニシティという二元論の回避

しかしこのような「ネーション（ナショナリティ）」と「エスニシティ」の関係は、前述のように同一の論理構造のネガとポジの関係にある。「伝統の創造論」と同様、近代主義的アプローチのネーションの虚構性の指摘は、本源性を示す概念としてのエスニシティを措定することになるからだ。しかしながら——当然のことでもあるが——、このようなエスニシティの本質とは何かという定義を試みることは、不毛なことであり、結局ネーションやナショナリズムを定義しようとするときと同じ袋小路に陥ることになる。いうまでもなく、エスニシティの伝統文化にしても、ネーションのそれと変わらず、過去のどこかの時点で創造され、変容していったものだからである。疑似エスニシティに対して、さらに真正エスニシティを措定しなければならないので、このような遡行の作業は無限に繰り返されることになるだろう。

上のような問題が生ずる原因は、虚構なものとしてネーションをおき、本源的なものとしてエスニシティにおいて、両者を別個の概念で指定したことにある。そのような区別を設けようとするのは、そのためのメタレベルの判定基準がさらに必要になるので、根本的には不可能であり、このような自己言及的な悪循環のレトリックには、はじめから乗ってはならないのである。

したがって、たとえ伝統が創り変えられ、新たな意味付けが与えられたとしても、人々がそれを受容し、愛着をもつようになったプロセスを検討してみることに意義が生まれてくる。つまり、そのような伝統のなかには受容されず、忽ちの内に忘れられていくものがあるなかで、人々が特定のものを受け入れ、それまでの過去との連続性を感じるようになったことを考慮する必要がある。たとえ伝統の恣意的な捏造があっても、どのようにしても構わないわけではない。M・フロッチは次のように正鵠を射た指摘をしている。

「ナショナルな観念の普及は特別な社会的設定のなかで生じることができる。ネーション・ビルディングは決して野心的で、ナルシスティックなインテリの単なる企てではない。[……] ネーションの成立のための特定の客観的前提がすでに存在しているならば、インテリはナショナル・コミュニティを創造することができるのである」³⁰⁾

ナショナリストが戦略的に伝統を操作しようとしても、決して無条件でそれがおこなわれたわけではない。それが受容されるには一定の条件が先行して決まっていたはずである。したがって、そのような行為の一定の方向付けをするマトリックスであるハビトゥスとしての「持続する伝統」は、絶え間なく存在していたことを確認することは可能である。もちろん、この「持続する伝統」も、「創られた伝統」との相互作用によって、緩やかに変化し続ける。しかし、「持続する伝統」によって、人々は自らのネーションやエスニシティのなかに遠い過去からの連続性を見だし、リアリティを感じ、愛着をもつようになるのである。

したがって、少なくともこの点に関してはエスニシティを原初的なものとして指定するのではなく、ネーションと同様の構造をもっていると指摘することができる。本稿で、エスニシティをとくに扱わないのは、ネーションのなかにエスニシティの問題も根本的には含まれていると考えられるからである。

近年では世界で頻発するナショナリズムがとくに「エスノナショナリズム³¹⁾」や、「エスニック・ナショナリズム³²⁾」と呼ばれるようになってきている³³⁾のは、このような状況と深く関連している。政治的、経済的、文化的な自立を求めるナショナリストティックな要求は、原初性を装われたエスニシティと常に重ね合わされることによって正統性を得ているからで

ある。

以上の考察から、ネーションにはゲルナーらの議論が検討した近代的現象の側面のほかに、ネーションに対して、愛着や忠誠心を掻き立てる源泉となる前近代からの「持続する伝統」といえる連続性があることが析出された。

次章においては、アンソニー・D・スミスの永続主義的アプローチからなされる研究によって、ネーションの前近代からの連続性が、どのようなかたちで近代のネーション形成に影響を与えているかを検討していきたい。

3 前近代的共同体としてのネーション-ステイト

3-1 ネーションの前近代的基礎としてのエスニー——アンソニー・D・スミス

アンソニー・スミスは、中世以前にも、近代ネーションにみられるような特定の共同体に対する人々の帰属意識や、他の集団に対する排他的なエスノセントリズムがみられることに注目している。なぜならばそれらがネーションを構成する際の土壌となって人々の凝集性のネットワークを形成し、維持するために作用しているとみているからである。スミスによれば、近代主義的アプローチが主張するようには「ナショナリストは「無から *ex nihilo*」ネーションを創ることはできないし、しないのである」³⁴⁾。たとえ、伝統の創造があったとしても、ネーション統合を効果的に実行するには、すでにある伝統的紐帯を前提条件としなければならない。

「かなりの程度、近代のナショナリズムとネーションの性質や限界を決定し、またエリートたちが彼らの目的を短期間で達成しようとするならば尊重しなければならない「エスニック・ルーツ」があるということなのである。我々が操作する文化形態は、それ自体が我々が自分たちの文化形態を獲得するために利用できる目的と手段の強力な決定要素なのである」³⁵⁾

スミスが述べるように、ネーションやナショナリズムを形成する際の枠組みには、前近代からの「エスニック・ルーツ」があり、それは「操作する文化形態」として一定の前提を決定している。そして同時に、知識人エリートらによって操作された文化形態が人々に受容されるか否かの一定の条件をもあらかじめ決定している。ナショナリズムが積極的な大衆動員を可能にしたのはそのような伝統的紐帯と共鳴する側面を含んでいたからこそなのである。

もちろん、前近代からの共同体はそのままの状態を保持したままで、現在のネーション

を構成していたわけではない。古代のギリシャ人やペルシャ人、中世のセルビア人が、現代のギリシャ人、ペルシャ人、セルビア人の直系の祖先であるということは明らかに疑わしいだろう。さまざまな時代や世代を通じて、個人的なレベルでは人々はさまざまに共同体への所属を変えていくが、集合的なレベルでみれば、そこにはひとつの共同体の連続性を人々に感じさせる固有のアイデンティティ、集合意識があり、排他的な力を永続的に維持する自他の「境界」が存在している（これは客観的な「境界」ではなく、間主観的な「境界」である）。したがって、過去のエスニックの共同体がもっている集合的アイデンティティの意味内容は文化、時代、政治的状况などから影響を受けて、大変ゆっくりとしたペースで変化をしながらも、一貫した共同体の特徴が人々の感覚のなかに残っていく。そして現代のネーションにもその特徴が色濃く反映されているのである。

それらの前近代における共同体を、スミスは「エスニシティ」とは特に区別して、「エスニー ethnie」と呼ぶのであるが、エスニーとは次のような属性をもっている共同体である³⁶⁾。

- 1 包摂された人々の単位に対する共通の一つの名前、シンボル
- 2 共通の起源と祖先についての神話
- 3 共通に経験した（とみなされている）出来事の歴史的記憶（とりわけゴールデン・エイジの記憶）
- 4 共通の「歴史的領土」や「ホームランド」をもつ社会組織
- 5 共通の文化の要素——言語、慣習、宗教、価値観
- 6 共同体のほとんどのメンバーの連帯感覚

以上のような特徴をもつエスニーは、ヨーロッパに限らず、世界中のほとんどの前近代社会においてみることができる。そしてエスニーの文化的紐帯が、領域国家や官僚制、産業資本主義などの近代化のプロセスにおいて、ネーション形成の基盤になる。

しかしながら、このような「神話、記憶、価値観、シンボル」などが、すべてのエスニーに均等にあるわけではないので、各エスニーの形態の違いによって近代ネーションが首尾よく形成されるか否かが左右されている。したがってエスニーはさらに「傍系的-貴族的エスニー lateral-aristocratic ethnie」と「直系的-民衆的エスニー vertical-demotic ethnie」の二類型に分けることができる。

傍系的-貴族的エスニーとは、階層的には宮廷、貴族、司祭、役人、富裕商人のような上層に限定されており、その領域は相対的に広く拡散し、地域的な根深さには欠けているエスニーである。現在の市民的ネーションは多くの場合、このエスニーの主導によって形成

された。

直系的-民衆的エスニーとは、領域が貴族的エスニーと比べて小さく、その文化的特徴は汎階級的な拡がりがあるエスニーである。メンバーは民族宗教的な運動や、同一の共同体から選ばれることの多いカリスマ的リーダーによって容易に動員される。

前者の貴族的エスニーはリテラシーや堅固な建造物が豊富にあり、また過去の記録や保存のための専門家も備えていることよって、多くの神話や歴史的記憶、シンボルを世代を超えて永続させることが可能である。そして当然、それらが近代ネーションの伝統に強い影響を与えることになる。それに対して、しばしば周縁的なエスニーである民衆的エスニーは、数世代にわたるような民族的記憶を十分に保存できない。しかしながら、大衆動員力の強さでいうならば、民衆的エスニーは狭い地域に深く根ざしているのので、ネーションの文化に傍系的 lateral に参入した貴族的エスニーによる官僚的統合の過程においても、民衆的エスニーの文化的特徴への配慮は、近代国家建設を達成する必要条件であったのである。したがって、スミスは民衆的エスニーの文化がネーションの文化内容に対して直接的に影響を与えているので、それを直系的 vertical エスニーとも名付けている。直系的-民衆的エスニーは、近代化のプロセスの中で支配的なエスニーとのコンフリクトを伴いながら緩やかにその性質を変化させていったのである。たとえばE・ウェーバーの研究で知られているように、ネーション-ステイトのモデルケースのひとつとして考えられているフランスのような場合でも、1789年の大革命以降の強い中央集権による大衆教育と徴兵制のなかで「農民がフランス人に peasants into Frenchmen」変わるのは十九世紀の終わりまで待たねばならなかった³⁷⁾³⁸⁾。

したがってスミスによると民衆的エスニーから市民的ネーションへの移行は次のような過程を経ることになる³⁹⁾。

- (1) 統一された政体をもつ共同体への移行
- (2) 明確に限定された「ホームランド」の普遍的な認識。外部との相互承認
- (3) 領土内の資源の自分たちの手によるコントロールと経済的な自立
- (4) エスニック的性格のメンバーから法的な権利や義務をもつ市民への移行
- (5) 大衆を道徳的、政治的中心に据えて、彼らがネーションであるという価値、神話、記憶を再構成し、再教育することによって、大衆の新しい役割を賛美すること

つまり、こうした近代化の流れのなかで、人々は過去から連続するエスニーの神話や記憶、価値、シンボルに裏支えされるようにして、それぞれのネーションの枠組みを形成し、政治化していったのである。換言すれば「生き残るために、エスニーはネーションフード

という属性のいくつかを引き受け、市民モデルを採用せねばならなかったのである」⁴⁰⁾。そしてそれに不幸にもうまく適合しなかったエスニーは、「曲げられた小枝」⁴¹⁾ となって現在のエスノナショナリズムの要因となっているのだ。したがって、前近代からの特定のエスニーの性格の残滓が、ネーション-ステイトへの情緒的なアタッチメントの源泉であることを説明しつつも、スマスは決してネーションが原初的であるとも、前近代的性格が固定化されて残っているとも主張しているわけではない。ただ近代のネーションの系譜は、近代以前に遡行していくことが可能であることを示したのである。しかし、近代ネーションと連なる前近代のエスニーの存在を剔抉する永続主義的アプローチによって、近代主義的アプローチによっては説明の難しいネーション-ステイトの情緒的側面の説明を引き出す可能性があることが確認された。

3-2 永続主義的アプローチの意義とその限界

以上のように、近代ネーションの情緒的紐帯を前近代からの連続性から導きだし、それがどのようにネーションを構成するかをみてきた。しかしながら注意しておきたいことは、貴族的エスニーあるいは民衆的エスニーの複数のエスニーがひとつのネーション-ステイトを構成するという点である。確かにひとつのネーションを構成するには、特定のエスニーに限定されている。ネーション-ステイトの秩序を維持するには、特定の民衆的エスニーを中心とする文化的紐帯を築くことが不可欠であろう。しかし、エスニーの特徴で挙げた「共有された神話、記憶、価値観、シンボル」自体には、ネーション-ステイトという政治的単位と厳密に一致しようとする志向をもっていない。言い換えれば、過去のすべてのエスニーがネーションの形態に変容したわけではなく、しかも地球上は隈無くネーション-ステイト（あるいはインターステイト・システム）によって覆い尽くされているわけだから、ネーションを立ち上げる潜在的な可能性をもつエスニーは既存のネーション-ステイトに常に内包されていることになる⁴²⁾。つまり、ゲルナーが的確に示したように

「すべての有効性をもつナショナリズムには、n個の潜在的な可能性をもったグループ、つまり農業社会から継承された文化によって定義されるグループや、あるいは等質的な産業共同体を立ち上げることの可能な、「先行した」原理に基づく）他の結びつきによって定義されるグループがある。しかしそれにもかかわらず、それらはわざわざ〔自立性を求めて〕闘争しようとはしないし、潜在的なナショナリズムを起動しない。またそれを試みようとはさえないのである」⁴³⁾

ゲルナーによれば、ナショナリズムを引き起こしても不思議ではない「潜在的な可能性を

もったグループ⁴⁴⁾」があるということは、とりもなおさずナショナリズムが前近代の紐帯とは別に原因をもっていることの証左となる。それゆえにナショナリズムには前近代に遡るような起源がなく、近代において創られた産物であると結論づけられている。たしかにゲルナーの論点自体は妥当性をもっているのだが、導かれた結論についてはいささか論理を短絡化しているといえるのではないだろうか。

上のゲルナーの議論は、本章においてこれまで検討してきたスミスの議論を考慮に入れて、次のように補足した方がよいだろう。すなわち、ネーションは前近代のエスニーの紐帯を必要とするが、政治的、経済的な自立を求め、明確に決められた領土と文化的領域の一致を要求するナショナリズムの原理⁴⁵⁾は近代にしか起源をもたないのである、と。あるいは、ゲルナーは前節で示したエスニーの1～6の特徴から(1)～(5)への移行を伴うネーションの変容に注目して、ナショナリズムが前近代に起源をもたない近代的現象であると主張していたと整理できる。しかし、もちろんネーション形成が成功するか否かは前近代からの永続性に大きく左右されているわけである。

ただし、スミスの議論は「n個の潜在的ネーション」(≡エスニー)が将来エスノナショナリズムを引き起こすかどうかまでも示しているのではない。スミスはただ、顕在しているネーションを現在から「系譜」的に遡及していくことが可能であるということを明らかにしたのである。

結びにかえて

このように、スミスの永続主義的アプローチからなされる議論は、控えめではあるが、近代主義的アプローチのいき過ぎた結論を是正する上で重要な意義がある。そして、近代以前のネーションの系譜を考慮に入れることは、本稿の冒頭で述べた今日のネーションやエスニシティをめぐる困難な状況に直面する際にも、ひとつの有効な視座となるのである。ただし、誤解を避けるために確認しておきたいことは、ここから得られる認識がネーション統合の根拠を過去へ求めるナショナリストのロマン主義的主張とも、ネーションが遠い過去から不断に続いているものだと感ずる生活者の素朴な実感ともはつきり異なっていることである。なぜならばそのような歴史修正主義的な認識は、つねに現在の視点からなされる解釈によって過去を一元的で首尾一貫した意味へと収斂し、現在のネーションのための歴史物語(hi-story)に編集するが、永続主義的アプローチによる認識は、近代以前の特定の時代における人々のあいだで、いかに自らのエスニック・コミュニティの言説やメンタリティが編制され、実定性をもって保持されていたかを析出し、それが現在のネーションと系譜的に連なっているか否かを示そうとするものだからである。

しかもまた、以上のわれわれの議論からわかるように永続主義と近代主義のパースペクティブは決して両立しないものなのではない。これら二つのパースペクティブの錯綜した分析空間の構築によって、われわれは多面的なアスペクトをもったネーション-ステイトについての、より深い理解へ踏み込むことができるのである。

- 1) Ernest Gellner, *Nations and Nationalism*, (Blackwell, 1983)
- 2) Ernest Gellner, *Nations and Nationalism*, p.125.
- 3) しかし、J・ブルーイリのゲルナー批判にみられるように、産業化にともなう空間的な移動は確かにあったとしても、社会階層の移動がこれと同時に（とりわけ下層労働者階級のあいだで）高まったことは疑わしいという指摘もある。John Breuilly, "Reflections on Nationalism", *Philosophy of the social science* 15,(1985), p.68.
- 4) Ernest Gellner, *Nations and Nationalism*, pp.24-25.
- 5) Karl Deutsch, *Nationalism and Social Communication*, (MIT Press, 1966)
- 6) Ernest Gellner, *Nations and Nationalism*, p.50.
- 7) たとえば、G・オーウェルは次のようにpatriotismとnationalismを区別している。
 「わたしが「patriotism」という場合、自分では世界中で一番良いもののだとは信じるが他人にまで押しつけようとは思わない、特定の地域と特定の生活様式に対する献身を意味する。patriotismは軍事的な意味でも文化的な意味でも本来防衛的なものである。これに反して、ナショナリズムは権力欲と切り放すことができない。すべてのナショナリストの不断の目標は、より大きな勢力、より大きな威信を獲得する。といってもそれは自己のためではなく、彼がそこに自己の存在を没入することを誓った国なり、何なりの単位のために獲得することである」(ジョージ・オーウェル、
 「右であれ左であれ、我が祖国」、鶴見俊輔編、平凡社、1971年（原書1968年）、84頁）
 邦訳書ではpatriotismは愛国心と訳されているものの、前後の内容から判断すれば愛郷心（郷土愛）とした方が適当であると思われるが、ここでは原文のまま表記しておく。
- 8) Ernest Gellner, *Nations and Nationalism*, p.49.
- 9) 紙数の都合上本稿では論じられないが、B・アンダーソンの「想像の共同体」論においても、同じく近代主義的アプローチが採られていることは周知のとおりである。ただし、アンダーソンは近代化における人々の間主観的レベルでの社会「意識」の変化を検討しており、社会構造の変化に注目しているゲルナーの視角とは大きく異なっている。ここでの論点をはっきりさせる意味でも両者の視角の違いに注意を払っておいてもよいだろう。
- 10) Tom Nairn, *The Break-Up of Britain; Crisis of Neo-Nationalism*, (New Left Books,1977), p.335.
- 11) エティエンヌ・バリバル／イマニユエル・ウォーラーステイン「人種・国民・階級」、若森章孝(他)訳、大村書店、1995年（原書1990年）、134頁参照
- 12) Michael Hechter, *Internal Colonialism; The Celtic Fringe in British National Development, 1536-1966*, (Routledge,1975) ., Michael Hechter and Margaret Levi, "The comparative analysis of ethnonregional movement"*Ethnic and Racial Studies* Vol.2-3, (1979)
- 13) Walker Connor, *Ethnonationalism*, (Princeton University Press, 1994)
- 14) 付言すると、経済状況が全く関係していないということはあり得ないものの、経済還元論的なこの種の議論が、なぜ経済問題が階級的な問題ではなくネーションやエスニシティの問題に結

びつきやすいのか、またなぜそれらの紐帯が経済摩擦に関する要因とみなされるのかという問いに対しては説得力のある説明をしていないのである。

- 15) Tom Nairn, *The Break-Up of Britain; Crisis of Neo-Nationalism*, p.340.
- 16) ただしギデンズの場合、最初の国境の線引きは1718年のフランダース地方に関する条約であるとしている。Anthony Giddens, *The Nation-State and Violence*, (Polity Press,1985), p.90.
- 17) Anthony Giddens, *The Nation-State and Violence*, p.116.
- 18) cf.,Anthony D. Smith, *Nations and Nationalism in a Global Era*, (Polity Press,1995), p.88.
- 19) Anthony Giddens, *The Nation-State and Violence* , p.119.
- 20) Paul James, *Nation Formation, Towards a Theory of Abstract Community* , (Sage,1996) , pp.14-15.
- 21) Benedict Anderson, "The New World Disorder", *New Left Review* No.193,(1992), pp.12-13. (「遠隔地ナショナリズム」の出現」、関根政美訳、『世界』1993.9号、189-190頁)
- 22) Ernest Gellner, *Nations and Nationalism*, p.122.
- 23) Eric Hobsbawm, *Nations and Nationalism since 1780; Program, Myth and Reality*, (Cambridge University Press,1990), p.183.
- 24) Gellner Ernest, *Nations and Nationalism*, pp.55-56.
- 25) E・ホブズボウム／T・レンジャー(編)『創られた伝統』、前川啓治・梶原景昭(他)訳、紀伊国屋書店、1992年(原書1983年)
- 26) Craig Calhoun, "Nationalism and ethnicity", *Annual Review of Sociology*, vol 19,(1993), pp.222-223.
- 27) Benedict Anderson, *Imagined Communities; Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, (Verso,1983/1991), p.6. (白石隆・白石さや訳、『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』、リプロポート、1987年、17頁。白石さや・白石隆訳、『増補 想像の共同体』、NTT出版、1997年、24頁)
- 28) N・グレーザー／D・P・モイニハン(編)『民族とアイデンティティ』、内山秀夫訳、三嶺書房、1984年(原書1975年)、3頁
- 29) 本間長世『多民族社会アメリカの行くえ』、岩波書店、1992年、20頁。関根政美『エスニシティの政治社会学』、名古屋大学出版会、1994年、4頁
- 30) Miroslav Hroch, "From National Movement to Fully-Fedged Nation"*New Left Review* No.198, (1993), p.4.
- 31) Walker Conner, *Ethnonationalism*
- 32) Anthony D.Smith, *Ethnic Origins of Nations*, (Blackwell,1986)., *Nations and Nationalism in a Global Era*
- 33) cf.,Ma Shu Yun, "Ethnonationalism,ethnic nationalism,and mini-nationalism:a comparison of Connor, Smith and Snyder" *Ethnic and Racial Studies* Vol.13-4,(1990)
- 34) Anthony D.Smith, "The origins of nations"*Ethnic and Racial Studies* Vol.12-3, (1989), p.343.
- 35) Anthony D.Smith, *Ethnic Origins of Nations*, p.18.
- 36) Anthony D.Smith, *Ethnic Origins of Nations*, pp.22-30 ., "The origins of nations", p.348.
- 37) Eugen Weber, *Peasants into Frenchmen; The modernization of rural France,1870-1914*, (Stanford University Press,1979)
- 38) ただし、見落してはならないことは、フランスは大量の移民の受け入れ国であったということである。1920年代では、アメリカが、自由な移民の受け入れの戸口を閉ざしたのに対し、フラン

スは人口比では移民受け入れの第一位であった。たとえば、1921年から1926年のあいだの移民受け入れは、10万人あたり、アメリカが492人であったのに対し、フランスは515人であった。Dan Dignan "Europe's melting pot: a century of large-scale immigration into France", *Ethnic and Racial Studies* Vol.4-2,(1981) p.138.

39) Anthony D.Smith, "The origins of nations" p.356.

40) Anthony D.Smith, *Ethnic Origins of Nations*, p.157.

41) アイザイア・バーリン、「曲げられた小枝」『バーリン選集4』、福田歎一・河合秀和編・訳、岩波書店、1992年（原書1990年）

42) 『TIME』1992年7月20日号によれば世界の186カ国のなかで、単一の民族から構成されている国家は全体の10%にも満たないという（この数字はスミスも挙げており、現在の国家のほとんどはせいぜいナショナル・ステイトであると述べている。Anthony D.Smith, *Nations and Nationalism in a Global Era*, p.86.）。

もちろん、民族の定義付けによってこの数字は変わるし、厳密に言えば単一民族で構成されているといえる国家はあり得ないが、おおよその状況を示しているとはいえるだろう。

43) Ernest Gellner, *Nations and Nationalism*, p.45.

44) スミスの用語を使えば、「エスニー」と言い換えることができるだろう。

45) ここでは、以下のゲルナーによる明確な定義を念頭においている。

「ナショナリズムとは第一に政治的単位とナショナルな単位が一致すべきであるとする政治的原理である」(Ernest Gellner, *Nations and Nationalism*, p.1.)

文化的要素であるエスニーのなかには、エスニーが政治的な単位と一致すべきであるとする原理は含まれておらず、それは近代に生まれたのである。

sympathy with others. NABA* (self help group of eating disorders) suggests us "*iikagen-ni-ikiyou*". When our selves are independent, we can live such the way of life.

In this article, I try to describe the transformation of self in the modern society and independence of the self, using Keiichi Sakuta's theory of self. He says the self has three phases: "independent self", "social self", "transpersonal self". I think "social self" makes codependent relationship and wholism, and "transpersonal self" experiences "ecstasy", "life felt". In such ecstasy, one feels that there's no boundary between his or her self and others'. One of the aims of this article is to show the meaning of "transpersonal self" in the modern society.

*NABA=Nippon Anorexia Bulimia Association

Modernism and Perennialism in the study of Nation-States

Akihiro NOMURA

The purpose of this article is to clarify the differences of two major approaches in the study of nation-states and nationalism--a modernist approach and a perennialist approach. The modernist approach, which is a dominant and fashionable paradigm in the study of nation-states and nationalism today, holds that nations and national identities were invented by the intelligentsia in the process of modernization which brought about the dynamic change of social structures. This perspective emphasizes that nations are a modern phenomenon, which is mainly produced by numerous modern dimensions of social and cultural change caused by industrialism, capitalism, bureaucracy and secularism. As argued by modernists like E. Gellner, B. Anderson and E. Hobsbawm, only in the era of modernization was there any possibility of unifying disparate populations.

In contrast to what modernists argued, people in daily life tend to believe their roots of national identities simply because they are originated from pre-modern past. That is, people treat nationality as somehow naturally given. In most conflict, people claim their rights of self-determination on territory, law, economy and education referring

to their ancient ties and pre-modern sentiments. It is true that nations are the products of modernization, but modernists fail to explain why many people believe in the continuity from pre-modern ethnic solidarities to modern nations.

Perennialist as represented by A. D. Smith suggests that there are ethnic roots called 'ethnies', the term coined by Smith. 'Ethnies' determine, to some degree, nature and frames of modern nations. It goes without saying that as the strategy of nation-building, it is the national history and culture that the intelligentsia and elites utilized, as the modernists pointed out. But in order to attain their goals, they had to mobilize the basis of pre-existing collective identities which bring about people's strong attachment. The perennialists concentrate their attention on the pre-existing conditions, which determine both goals and means for each nation in the manipulation of modern nationalists.

The modernist approach can't explain sufficiently why ethnic conflicts broke out frequently in many part of the world after the cold war. Thus, as the perennialists tried to show the reasons for these ethnic conflicts, we came to pay attention to genealogies of modern nations.

It is not until we use these two approaches that we could understand more deeply the complex and controversial problems of nations and nationalism.

The Formation of Wlodek Wiszniewski's Personality Against the Background of Polish and American Society in the Early-Twentieth Century: Life History Method in *The Polish Peasant*

Ryutaro TAKAYAMA

Since the latter half of 1970s, many sociologists have again begun to become interested in life history material. However, the first development of the life history method began in 1920s at Chicago University. W. I. Thomas and F. Znaniecki's *The Polish Peasant in Europe and America*, published in 1918-1920, is the first study that critically uses life history in terms of a theoretical framework. In this paper, I shall review the method of using a life history in *The Polish Peasant*.